

チベット仏教に見る信仰表現

——五体投地巡礼を例として——

芳村博実

(龍谷大学)

はじめに

ここに、分析の対象となる現象として、まず見るべきものがある。チベット仏教徒の五体投地の姿である。この現象は、チベット自治区に限られない。インド北部のラダック地方にあるヘミス・ゴンパ、中華人民共和国青海省に位置するクンプム寺、チベット自治区ラサのジョカン寺、私が実際に見た限りでも、およそチベット仏教文化圏と呼ぶほどの場所では、ごく普通に目に入る光景と言える。いや、それだけではない。インドにおける仏陀覚醒の地であるブッダガヤを始めとする聖地では、チベット人達が、この五体投地を繰り返す。インド亡命政府のあるダンマサラは元より、南インドでもチベット人達がいる所では、彼等彼女等の五体投地を目にすることになる。それが、アメリカ合衆国でも、日本でも事情は同じである。

日本の僧侶も五体投地はする。中国でも仏像の前に両手をつけて参拝する姿はごく当り前の光景である。しかし、現象として何かが違う。日本の僧侶の五体投地は、板敷き又は畳敷きの部屋の中でなされる。それに対してチベット人達の五体投地は直接地面の上でなされる。その違いだ、とも見ることが出来るが、そうでもない。中国の在家仏教徒も仏像の前では土間に直接、額衝いて参拝する。従って、直接地面に五体投地することが、チベット仏教徒にとって特異なこととはならない。

では、一体どこにチベット仏教徒の信仰表現たる五体投地の特異性を見るのか。それは、例えば五体投地をしながら巡礼をするという行為の中に見られるであろう。例えば、木村肥佐生は、その著『チベット潜行十年』の中でクンブム寺での巡礼者の叩頭礼拝を目撃して次のように述べる。

「本堂の前では数十人の巡礼者やラマ達が叩頭礼拝をくり返している。その足元の板は磨滅してへこんでいる。はなはだしい者は内蒙からクムブム寺まで、またはチベットまで全道中を叩頭礼拝しながら自分の身長だけ一歩々々進み、なん年もかかって巡礼する熱狂的信者もいる。⁽¹⁾」

チベット仏教徒の全てにとって最も聖なる場所として有名なラサ・ジョカン寺の回りを巡るバルコルでは、現在でも多くのチベット仏教徒が、五体投地を繰り返しながら、伝統に従って右回りに寺を回っている⁽²⁾。今、仮にそれを五体投地巡礼と呼ぶことにする。五体投地を繰り返しながら、その身長の長さだけ歩を進め、巡礼をするという行為には、何点かの特徴が挙げられよう。その場その場での礼拝行為、限りない困苦勞力、自己犠牲などなどである。

こういった人間の行為は一体何なのか、が現在の論文の焦点となる。素直な目でこの現象を見る時、色々な疑問が浮かび上がって来る。その起源は、仏教文化に由来するものか。果たして、他の宗教にも見られる現象なのか。そこで、まず人間がその五体を接地する行為が一体何かという疑問から探ねて、チベット仏教に見る五体投地巡礼のもつ固有の在り方を特徴づけたい。

1 五体投地を分析する

五体投地は、仏教の歴史の中では、極一般的に礼拝の形式である。漢訳

で「稽首」と訳されるものがそうである。頭を地につけ、相手に尊敬を表わす礼拝行為で、「稽首仙人足」などの熟語として使われる。

この「稽首仙人足」(pādaḥ śirasā vandati) の場合は、礼をなす当事者が額を相手の足につけることによって相手に対する尊敬を表現するものである。これらの言葉の用例は仏典中に時代を超えて数知れない。仏教徒に固有のものというわけではなく、インド一般に見られた礼儀作法と言ってよい。例えば、『仏所行讃』(Buddhacarita) の12章には、釈尊がナンダパラから牛乳を供養されるシーンがある。

「彼女は信心に歓喜いや増して、蓮のごとき眼をぱっちりと開き、頭を垂れてその足下にひれ伏し、彼に牛乳を(ささげ、それを)摂らせたのであった。」⁽³⁾

sā śrāddhā-vardhita-prītir vikasal locanōtpalā /
śirasā praṇipatyāinaṃ grāhayāmāsa pāyasam //

この「足下にひれ伏す」の部分が漢訳では「稽首菩薩足」⁽⁵⁾に当たる。このシーンは、仏教徒にとって大変馴染み深いシーンである。確かに、釈尊に対して、仏教徒が礼をする時に、稽首という行為は極普通に行なわれるが、今の場合、稽首という礼をとる主体が、仏教徒ではなく、一般の女性である。従って、この場面の表現から見れば、稽首が、ごく一般的にインドで行なわれていた礼儀と言うことになろう。しかも、大切な注意点として、この行為が、あくまで、尊敬を相手に表現するためになされていることを特に挙げておきたい。その上で、この両手を接地する行為を西洋の学者がどのように分析するかを見てみたい。

この行為を分析するに際しては、まず第一に当然のことながら、直立の放棄が考えられる。そして、そこから分析者は種々の意味を派生的に、くみ取ることとなるようである。跪き、両手を地面に着けることが、五体投

地の最初の前提となるが、そのような姿勢は立って歩行するという、ほぼ人間に独特で固有の特権を放棄することに他ならないと言うのである。しかも、それが、人間としての自己の尊厳までも放棄し、卑下するものであれば、分析する例があるのである。

インドを超えて、このような行為が多く見られることを A. E. Crawley は、*Encyclopaedia of Religion and Ethics* の中で次のように報告している。例えば、J. Thomson は、その著『中央アフリカの湖』の中で、アフリカで二人の地位の高いものが出会った時の状況を説明し、以下のような例を挙げる。

「二人の高い位のもので出会うと、年少者が前屈みとなり、両膝を折り跪き、両掌を地につける。」

‘When two grandees meet, the junior leans forward, bends his knees, and places the palms of his hands on the ground.’⁽⁷⁾

また、V. L. Cameron によってもその著『アフリカ横断』の中で、同様のことが報告されている。これらの報告でも明らかなように、両膝と両手を地面に着け、頭を下げる行為はインド以東に限ったものではない。

ところが、この行為を分析して、A. E. Crawley は、跪くという行為は自己卑下と嘆願の行為であると見る。⁽⁹⁾五体投地よりは高級であるが、文化的に低級な人々のものであり、高位の者に対する依存がそこに見られるという。直立の姿勢を自立の象徴であると見、その直立を放棄する行為だというのである。その分析は明らかに過ちを犯している。

尊敬を表現することと、自己の尊厳を放棄する行為とは別であるからである。ここでは頭を接地してはいないが、五体投地という行為を含めて、頭を下げ手を地に着ける行為を、自己卑下と嘆願の行為と見る分析者の判断の裏には、文面からも窺えるような西洋至上の価値観がある。だからこ

そ、彼は五体投地をより低級なものとして表現せざるを得ないのである。東洋におけるこのような行為を評価するに際しては、まず東洋の価値観を知る必要があるろう。

東洋の価値観、東洋人の礼儀作法の依って立つ根本を見ずして、五体投地を分析するわけにはいかない。彼の分析の視座は、二人の人間の間における上下関係のみにある。この行為の内にある二人の人間、頭を下げる方も、下げられる方も、その二人の人間の間になされる行為を、相手との人間関係のみを象徴する行為と見ているのである。それは、間違いである。東洋における礼儀行動の意味を全く取り違えている。

例えば、禅堂において礼をする場合はどうであろうか。警策で眠気を払ってもら場合、眠気を払って貰いたい修行僧が警策を持つ僧侶に要望して、修行僧自身を打たしめる。その後、互いに合掌し礼拝し合う。この時の礼は、二人の人間関係に基づく礼ではない。眠気ある一人の修行僧を他の修行僧が打つという行為の意味が、二人の人間関係の高低を象徴するものでないことを、むしろ確認し合う礼である。座禅をしている修行僧の要望によって、この行為はなされるが、それは単に人が人を打つ行為と理解されていない。仏道の威儀のままに修行坐禅することがそのまま仏が現われていることだ、と考えるからである。⁽¹⁰⁾ その場合修行僧が仏であり、仏が修行僧である。人間の上下関係を象徴するものではない。

例えば、托鉢僧に一般在家の人間が布施をする場合はどうであろうか。寒い京都の下町をもあちこちの禅寺の托鉢僧が経巡るが、布施者は布施を受けて貰う前に一礼し、受けてもらえばまた合掌一礼する。自己の頭を修行僧に下げる行為は、決して相手に対して自己卑下をしたり、嘆願する行為ではない。喜びであり、感謝の礼である。ここに西洋文化を背景として、その価値観の基に東洋人の行為を分析する分析者の限界を知る。

しかし、西洋人の中にも、跪き五体投地する人間の行為に別の意味を汲み取る者もいる。例えば、S. Langdon は、これらの行為が崇拜や礼拝の行為となることを認めている。これらの行為がスメリアの伝統的な宗教にはなかったことを述べながらも、それらがアッシリアやバビロニアにあったことを証拠づけられる、としているのである。しかも、それらが礼拝行為であったことを、祈願を唱えまた懺悔をするユダヤ人の宗教儀式の中に見ている。その上で、これらの行為をユダヤ教をもってその有力な起源と見ているのである。⁽¹¹⁾人間に対する尊敬、崇拜を表現する行為だと言うのである。

2 巡礼を分析する

A 巡礼 巡礼は仏教に限ったものではなく、他の宗教においても広く行なわれるものである。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などでも盛んに行なわれ、随分古い時代から行なわれている。動機もいろいろである。キリスト教の例をとっても、超人間的な援助を求めたり、神に対する感謝や懺悔など種々である。キリスト教の場合、2世紀のエルサレムへの巡礼記録が、ローマの発掘（Peter's Basilica）で明らかになっているし、ローマのキリスト教徒が354年に用いたカレンダーには、敬虔な信者が毎年集まる場所として29もの聖地を羅列している。中世になると巡礼者が通る道筋には宿泊所やカウンセラーを伴ったホスピスが用意されていた。そして巡礼者達が巡礼先の聖地から帰路に就くときには、巡礼先を示すバッジを着けた帽子を被り、一目で巡礼者と分かる服装をしていた。⁽¹²⁾

仏教においては、世間から出て僧侶となる以外に、何らか別の特別な目的をもって巡礼に出るという、早期の文献資料は存在しない。そこで、巡礼という言葉に対応する仏教述語を探すとすると、普通、「出家」を意味

するサンスクリット pravrajyā, またパーリで pabbajjā に対応することとなる⁽¹³⁾。しかし, A. S. Geden は異なった考えを出している。仏教の歴史の中でも, 最初期の段階から, 当時神聖と考えられた寺社への巡礼はよく行なわれ, その禁欲的な放浪が, 長くて辛い旅の終わりに宗教的な利益や功德をもたらず, と考えられていたと言う⁽¹⁴⁾。巡礼を探るには, 仏教徒が何を聖なるものと見たのか, 巡礼の目的地である聖地を如何に考えていたのか, その検討から入らねばならない。

B 聖地 『仏所行讃』II.37には, 罪悪を清浄にする機能が聖地にあることを述べている。

「彼は, 身と心を浄めるため, 巡礼地の水と徳の水をもって沐浴した。ヴェーダ聖典に規定された神酒ソーマを飲み, 同時に息子を見つめ, 心の寂静という安楽をだいじにした。」⁽¹⁵⁾

sasnau śarīraṃ pavituṃ manaś ca
tīrthāmbubhiś cāiva guṇāmbubhiś ca /
vedōpadiṣṭaṃ samamātmajaṃ ca
somaṃ papau śānti-sukhaṃ ca hārdam //⁽¹⁶⁾

この文章から聖地のもつ機能を『仏所行讃』が書かれたころのインドでどのように見ていたかが, 明らかになる。巡礼地を示す言葉が tirtha なる語で表わされている点が重要な意味を持つだろう。この tirtha とは, 川のことで, 広くは川の辺, 川へ至る小径も含めてこう呼ばれた。先に上げた A. S. Geden は, 初期仏教徒の故郷とも呼ぶべき場所と述べ, 原実は巡礼地と訳している。同時にこの『仏所行讃』の一文は, その聖地に罪悪を清浄にする機能があった, と見ていたことを表わしている。また, 別の箇所では, この聖地 (tirtha) を天への階段 (tīrthāni...sopāna-bhūtāni

nabhastalasya) と見る考えが窺える。

「靈験あらたかな数多くの巡礼地はこの庵をとり囲み、天国への階段となっておりませう。」

tīrthāni puṇyāny abhitas tathāiva
sopāna-bhūtāni nabhastalasya // ⁽¹⁷⁾

これらの聖地に関する概念は、仏教出現以前からのインド文化を反映したものであろう。

これらに対して、仏教徒独特の聖地も出現している。仏教の開祖である釈尊が、その生涯で節目となる出来事を持った場所であり、通常、四大聖地などとして挙げられる。カピラヴァスツ・クシナガラ・ブッダガヤ・ベナレスである。これらが聖地であったことは、インドを訪れた中国僧の旅記や、*Mahā-parinibbāna-sutta* に確かめることができる。

しかも、この *Mahā-parinibbāna-sutta* や *Milindapañha* では、『仏所行讚』同様、仏の骨に供養することや仏の徳を養って造塔することに功德を認めるのみならず、巡礼の功德を生天と示す特徴⁽¹⁸⁾が見られる。聖地というものを分析する場合、聖地こそが巡礼という現象を理解する鍵であり、巡礼の目的、動機もそこに集約されることになる。その意味で、T. G. Pinches が、バビロニアの巡礼を分析し、巡礼先の聖地が与える何らかの利益、物質、道徳、精神の獲得が巡礼の目的である、と述べることは充分意味があると言えよう。

しかし、チベット仏教徒の巡礼は、その現象が示すように道程の全てが聖地となっている。五体投地の礼拝を繰り返し、道程の全てを聖地という点で結ぶような巡礼の場合、目的地が如何に我々に聖なるものを提供しようが、そこにのみ焦点を合わせる分析では不充分である。

C 仏教巡礼の起源 仏教徒が仏教の教えと関係なく巡礼する起源は、仏教以前からのヒンドゥー文化の継承であろう。巡礼の功德と義務を説く教えは、元来、釈迦牟尼仏陀が直接説いた教えと考えられるものの中、つまり最古層と考えられる仏典の中にないからである。上に見たように、聖地の概念が仏教の中で、仏教独特のものとして、出来上がり、それを巡ることの功德と義務を述べだすのは、仏滅後のことである。仏教の聖地が仏陀の生涯の事跡と重なることが、逆に、仏陀生存中にそのような習慣が、仏教徒独特のものとして仏教的意義づけの下になかったことを物語る。

そして、この仏滅後という状況の中に、仏教の巡礼の特徴を探る糸口が見える。死んだ者と意思疎通をとりたいという思い、また偉大な死者を賛えたいというようなごく人間的な感情が、この巡礼という行為の底辺に見えるからである。従って、この考えに従う限り、仏教の歴史の中で、仏教徒が独自の巡礼を始めたのは、仏陀が亡くなって直ぐである、と想定出来る。仏陀の遺骨を分配したことで、仏教独自の巡礼が開始されたことと無関係とは思えないからである。

一方、仏教巡礼に関する最も古い資料は、アショーカー王の碑文である。即ち紀元前3世紀のものということになる。例えば、生誕の地ルンビニーへのアショーカー王の巡礼は、碑文の刻文そのものが、その巡礼が実際にあったことを物語っている。王の訪問と布施を受けた地方の権威者が、それを記念して文を彫っているからである。⁽¹⁹⁾ 彼は暇を見つけては、彼の領地にある仏陀の聖地を巡礼したようだ。

仏教徒は、雨期の季節以外には、定住することなく遊行した。このような仏教徒にとっては、一度設定された仏教の聖地を巡るという習慣は、加速度的に広がったと考えられる。仏教がガンジスの中流域を離れて、遊牧民を信者として取り込んで以降は、更にこの習慣は普遍的なものとなった、

と考えられる。仏教文献の中で、仏陀自身が巡礼の功德と義務を何度も繰り返すのは、比較的後期の大乘仏教文献と、その影響下にあった南方仏教に限られてくる、と述べるのは先の A. S. Geden 氏である⁽⁹⁾。

以上、仏教の歴史の中に、仏教独自の巡礼が発展した跡を見たが、さらに一つの問題にぶつかる。インドに発祥した仏教において仏教徒に独特の巡礼が存在しえたにしろ、それが純粹に同じものとして他地域に伝播するとは限らないことだ。仏教は文化であり、同じ「巡礼」と表現される仏教に基づく信仰表現が他地域に見られたとしても、それは別の起源を持ちうる可能性を秘めているのである。

巡礼の内容の変化は著しい。動機の違いが、まず挙げられよう。罪を清めるため、また福德を積むためなどなどである。そこには、異なった聖地の概念がある。例えば生天の場、仏陀の事跡を印す場所などによって区別はされる。しかし、一方では共通する局面も多いこれらの違いは、同じ起源から出発した違いと見ることができる。それらが、全て先の T. G. Pinches の巡礼の定義、すなわち「聖地という巡礼の目的地が与える何らかの利益、物質、道徳、精神を獲得すること」に該当するからである。言わば、生物学的分類で言えば、種を同一とする亜種の違いである。

3 五体投地巡礼の特異性

チベットにおける五体投地巡礼は、T. G. Pinches が定義する巡礼の形態とは全く異なる。聖なる場所に向かう点では、一見共通するのに見えるが、そこに信者が期待するもの、それは苦痛と忍耐の報酬としてのものである。道程の一点一点に五体投地礼拝を繰り返すという行為は、あらゆる空間と時間に聖なる仏を見始めた大乘仏教の仏身観では、当然のように見える。しかし、このチベット仏教徒の五体投地巡礼は、他宗教に見る、

特定の遠隔聖地へ向かう辛い旅路というレベルのものではない。「同行二人」と考え、巡礼の途路に弘法大師と共にあるという日本の巡礼とも明らかに異なる。むしろ、それは困苦を自己に課する作業である。それは、苦行と呼ぶことが、よりふさわしい。苦行は仏教においては、退けられた行為であることを思い出したい。『仏所行讚』第7章22偈は、以下のように言う。

「輪廻にまつわるもろもろの欠陥を見窮めることなく、苦行と名づけられる身体を痛めつける営みによって、(天国に達しようと) 欲するままに(新たな)活動に向かう人は、苦によって苦をもとめているのにほかならない。⁽²¹⁾」

kāya-klamair yaś tapo 'bhidhānaiḥ
pravṛttim ākāṅkṣati kāma-hetoḥ //
saṁsāra-doṣānaparīkṣamāṇo
duḥkhena so'nvicchati duḥkham eva //⁽²²⁾

従って、この信仰表現は、インドの巡礼とは根本的に異なるものである。私の知る限り、インドにおいてこのような巡礼を見ない。インドの他宗教における苦行は、よく知られる。しかし、巡礼の全過程を聖なるものと見、自己に困苦と忍耐を課する例を見ないのである。

このような、例はむしろ遙か西の方に見られる。バビロニアの巡礼を分析して先の T.G. Pinches は、「巡礼することによって得られる全ての利益は、労働と困苦の見返りとして要求されるものだ。弱い肉体を強くすることから不老長寿に至るまでのどのような利益であれ、である。(All kinds of benefits may be asked in return for the labour and travail, from the healing of a bodily infirmity to the gift of everlasting life.)」⁽²³⁾と述べている。また、キリスト教の伝統の中にも、聖なる場所に跪き参拝しながら到達する例を

現代の我々を見るが、そのことは、チベットの五体投地巡礼が、インド仏教からのものではなく、むしろ西の方からの信仰表現の継承と考えられないであろうか。

注

- (1) 木村肥佐生『チベット潜行十年』東京、毎日新聞社、1958. p.47.
- (2) チベット学の大先輩である Waddell が、このチベット人達の五体投地に着目している。
“The ruts have also been in some measure made by the heads and hands of kowtowing devotees, a row of whom were at this time performing endless obeisances in front of the closed door, prostrating themselves full length on the pavement, and rising, and throwing themselves down again, and so on incessantly for hours together to earn good marks for Paradise; ...” L. Austine Waddell, *Lhasa and Its Mysteries*, London: 1905. p.364.
- (3) 原 実訳『ブッダ・チャリタ』大乘仏典13, 東京、中央公論社, p.265.
- (4) E. H. Johnston, *Buddhacarita or Acts of the Buddha*, Reprint edition, Delhi: 1998. p.142.
- (5) 大正, 4 卷, 24 頁 c.
- (6) A. E. Crawley, ‘Kneeling’ *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, VII p. 746a.
- (7) J. Thomson, *Central African Lakes*, London: 1881. p.318.
- (8) V. L. Cameron, *Across Africa*, 2 vols. London: Daily, Isbister & co., 1877. I, p.226.
- (9) “Kneeling may be described as a natural reaction to the emotions of self-abasement and supplication. As such, it has been observed among unsophisticated peoples. In a less degree only than prostration, it symbolizes inferiority and dependence, by the abandonment of the erect posture of human active life.” A. E. Crawley’s p.746a.
- (10) 『正法眼蔵』「坐禅箴」には「若学坐禅すなはな坐佛なり」とある。(西尾実他『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』日本古典文学大系81, 東京、岩波書店, 1968, p.170)
- (11) “Kneeling and prostration do not, appear to have been admitted in the orthodox forms of Sumerian religion, but there is evidence for their use among the Babylonian and the Assyrians. Prostration and kneeling were

certainly acts of worship at certain points in the recitation of prayers and penitential psalms among the Semites, and on the whole it seems probable that they are of Semitic origin.” S. Langdon, ‘Worship (Babylonian)’ *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, XII, 758a.

- (12) ‘Pilgrim’, ‘Pilgrimage’ *Encyclopedia Britanica*, CD, 1998.
- (13) A.S. Geden, ‘Pilgrimage (Buddhist)’ *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, X. p.13b.
- (14) A. S. Geden, ‘Pilgrimage (Buddhist)’ *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, X. p.14a.
- (15) 原 実訳『ブツダ・チャリタ』p.43.
- (16) E. H. Johnston’s p.16.
- (17) E. H. Johnston’s p.74. 原 実訳『ブツダ・チャリタ』pp.144-145.
- (18) 例えは、T. W. Rys Davids and J. E. Carpenter, *The Dīgha Nikāya*, London: 1903. Vol.II. p.141. V. Trenckner, ed., *The Milindapañho. Being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*, London: 1880. p.177.
- (19) Radhakumud Mookerji, Asoka, rpt. 1928, Delhi: 1989. English translation, p.201. Inscription, p.244.
- (20) A. S. Geden’s p.14b.
- (21) 原 実訳『ブツダ・チャリタ』p.139.
- (22) Loc. cit. p.71.
- (23) Loc. cit. p.12.

